

公立大学法人山口県立大学 附属 郷土文学資料センターだより

『川口重美句集』復刻と句碑建立の周辺

上野 燎

『川口重美句集』は昭和三十八年に先輩俳友の下村貝鳥・水野白歌と私が三百句を選び、「風」主宰沢木欣一の序文を得てさらに友人達のカンパと長兄達仁の資金によって実現したものである。発行所は「風」が引受けてくれた。

朝日新聞が「幻の俳人、十四年目の句集」と文化欄のコラムに大々的に取り上げてくれて三百部はたちまち売り切れた。

重美の句が波動のように再発掘されていると伝わってきたのは今から四年くらい前であった。驚いたことに波を構成している俳人達が持っているのは句集の黑白コピーにすぎず、本物は見たこともないらしかった。重美が求められていると私は実感した。

たまたま重美の親戚で少年時を兄弟のように過した倉本宗剛との文通が復活した。彼も俳句を作る。再会すると話は当然重美のことに終始し、何かしなければならぬと共に思った。会食と電話のやりとりの結論が復刻である。

その語の適不適はともかく、私達の望んだのは、句集の“複製”であり、見返しの自筆句稿コピーや表紙を含む風合を再現せねばならぬということであった。

俳誌「山繭」主宰の宮田正和を巻きこみ、彼が発行所を引き受けてくれた。優れた製本技術を持つ内藤製本所が私の同じ町内にあったのも望外という他ない。「やるからには原本に可能な限り忠実なものを作る」といい、実際期待に応えてくれた。

「風」関係の僚誌その他が広告を無料で載せてくれた。“限定三百部、予約募集”などと。予約が殺到し、三百の予定は五百、千と引上げざるを得なかったが、たちまち完売してお断りにてんてこ舞いとなった。

* * *

亡妻の七回忌に「すばる俳句会」が夫婦句碑を建ててくれたのは一昨年秋だが、自責があった。重美句碑より先にできてよいのか、と。

藤井安子は重美の心の友である。自分が経営する雲谷窯元・雲谷亭の庭に重美句碑を建てるつもりで場所を決め、重美が下宿していた三の宮の方向を正面にすることまで考えていたのだが、事情があって断念していた。私は彼女を説得し昨年十一月に実現させた。

渡り鳥はるかなるとき光りけり
の一句である。

復刻版と句碑とで私がせねばならないことは終わった。私蔵の重美関係物もすべてこのセンターに保存されている。

彼が亡くなったのは二十五歳である。六十年が過ぎた。（文中敬称略）



▲藤井安子氏（左）と上野燎氏（除幕式にて）



▲復刻版『川口重美句集』

平成二十年、正月気分もぬけた頃であったと思う。一本の電話があった。上野療氏からであった。

「川口重美句碑を建てないか」というものであった。

ところがその電話の数分後、更にもう一本の電話が横浜からあった。川口重美の従兄弟倉本氏で実に六十年ぶりであった。「川口重美句碑の話があったのは本当か。その後どうなったか」であった。

私はその昔、ほんの五、六人の人々の立会いのもとで、ひそかに重美の句碑を建てようと思っていた。それは小さなもので、私の重美の句に対する愛着の形にして残しておきたかった。

そして、上野、倉本両氏の電話を受けた頃の私は句碑建立断念しようという思いが強くなっていた。何故かといえば、句碑建立予定地の周囲の風景が二、三十年ほどの間に激変したからである。

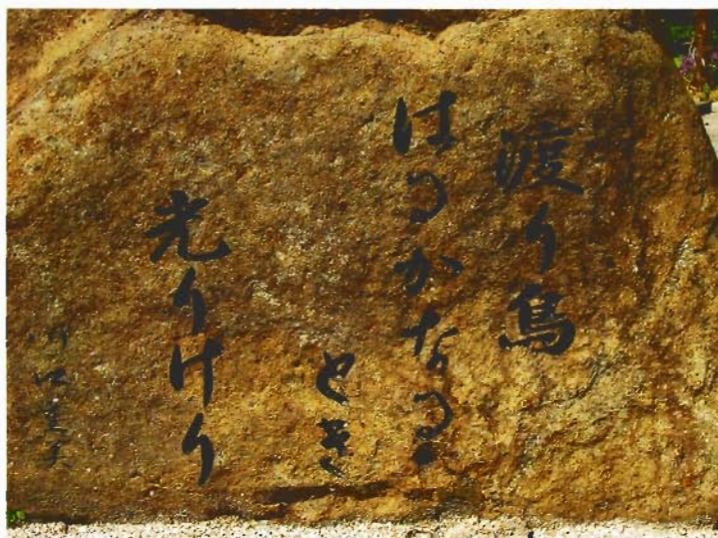
その頃、重美の住居の窓から、陸軍四十二連隊の練兵場の広大な草原を越えて、現在、碑の立っている場所を見通すことが出来る。私の立っている場所からも一直線に重美の住居の窓が見えた。それから何十年かの間に江良のこの辺りは開発の波に曝され、句碑と向き合う重美の窓の間に、コンクリートの建物が幾つも出来て、視界は完全に遮断されてしまった。

その頃またもや一本の電話であった。県立大資料センターの加藤先生であった。みてもらいたいものがあると。

そして私は県立大学の資料センターに伺った。

大型の耐火金庫に川口重美の資料が保管されていた。見覚えがあった。

ひそかに句碑を建てようと思っていた私だったが、六十年の長い歳月を思い、もうこれが建立のチャンスであると思い始めた。



▲句碑（正面）



▲句碑（裏面）

私が川口重美の句碑を建てようと心に決めたのは彼に関わった一人の人物の最後の言葉が脳裏から消え去らなかつたからである。

その人は、戦中戦後、中国配電山口支店に勤務していた私の上司であった、日出望氏である。重美没後、肺結核が悪化していた。十数年経っていた。

日赤病院結核病棟二十番室、日出氏最後の病室であった。

「川口重美さんへの理解が足りなかつた。死がどれ程、苦しいものか、重美さんがどれ程に悩み苦しんだか。深く理解しなくては…。」

重美没後十数年も経ってからの、昔の上司の最後の言葉である。日出氏の大きな目に大粒の涙が光った。あとは無言のまま。

その頃飲まされた結核の薬「パス」の薬包紙にきれいに書かれた俳句の紙箱を渡された。
句集『死に難し 日出望』である。

月日の経過は驚くほど早いものである。計画は浮かび上がっては消え、消えては浮かび上がる。川口重美没後六十年も経過した。ひとつの電話から次々…。

重美の手紙には、「学問と芸術のために、真実と真実をぶつけあって生きて行きたい」とあった。その重美の顕彰のために新しい繋がりが出来、決断が生まれ、また繋がりが…。

中田潤一郎氏の助言、東京の大林清子氏の句碑のアドバイス、多田先生の助言。それ等が大きく動いて良い石の決定。

造園師の杉山氏石工の田村氏とは小学校の同級生同士ということもあって仕事の運びは上々であった。

文字は重美の万年筆書きのものが原稿である。彫り師の石屋はこれを拡大、肉付けなんとか本人の文字に似せた。

これらの作業が進む中で県立大学の資料センターに重美の資料が保存されているということは大きかった。

声から声が、力が集まってその中から出来上がった。ささやかな句碑です。

最後にこれは句碑ではあるけれど、戦後の物資の何も無い大混乱のなかで学問と芸術への志向をもやし続けた一学徒の平和への記念碑でもありますように祈るのです。

生きん哲木の実つゝめる妹の手とる

郷土文学関係雑誌細目をデータベースとして公開しました。

本センターでは、平成19年度、平成20年度の重点的な取り組みとして、所蔵する郷土文学関係雑誌の細目作成を行いました。以下のURLに、その雑誌タイトルと簡単な内容紹介、さらに雑誌によっては細目も掲げています。

今後も最新情報の追加はもちろん、増補や欠号補充などを行い、さらに充実したデータベースとして更新していきますので、よろしくお願いします。

▽閲覧方法は、

「山口県立大学」のホームページの中から、

「郷土文学資料センター」 (http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/index.php?M_ID=10)

をクリックしていただき、さらに「所蔵資料について」→「郷土文学資料センター所蔵の郷土文学関係雑誌細目」の順にお進みください。

平成21年度 山口県立大学公開講座 やまぐちの文学

開催地：阿武町各公民館 時間：13：30～15：00 受講料：無料

月 日	場 所	内 容	講 師
5.30 (土)	中央公民館	宇野千代の文学	山口県立大学名誉教授 中原中也記念館名誉館長 福田百合子
6.7 (日)	福賀公民館	『朝顔日記』を読む	当センター研究員 木越 俊介
6.13 (土)	宇田郷公民館	『大内盛衰記』に見る大内氏の古代伝承と 『源氏物語』千年紀をめぐって	当センター研究員 野口 義廣
6.20 (土)	中央公民館	驚流狂言の世界	当センター所長 稲田 秀雄

寄贈図書

兼崎地橙孫顕彰会『花芙蓉－地橙孫百句抄－』（兼崎地橙孫顕彰会、2008年）・庄司肇『斯波四郎を読む』（文学街文庫、2009年）・上野燎監修『川口重美句集（復刻版）』（「山繭」発行所、2008年）・弘中千恵子『歌集 サフランの赤』（柊書房、2003年）・コスモス短歌会山口県支部『合同歌集 小宇宙 第11集』（山口県、2007年）・山本寛嗣他『小宇宙増刊号 山下清司氏追悼集』（山口県、2007年）・山下清司『歌集 山下清司全歌集』（柊書房、2008年）・やまぐち文学回廊構想推進協議会『やまぐち文学散歩』（やまぐち文学回廊構想推進協議会、2009年）

寄贈雑誌

『ほうふ図書館だより』240-245（防府市立防府図書館）・『其桃』768-773（其桃発行所）・『'08 現代山口県詩選』通巻45冊（山口県詩人懇話会）・『風響樹』37（風響樹同人）・『颯』80（颯文学会）・『文芸山口』284（山口県文芸懇話会）・『平成20年度山口県立大学附属地域共生センター年報』10（附属地域共生センター）・『萌』361-366（萌の会）・『中原中也記念館館報』14（中原中也記念館）・『新風土』1、3、8、9、15-19、21、160-162、164、167、168、170、171、174-178、180、181、183-186、188、189、191、192、194、196、198、199、201-205、207-211、213、214、216-233、236-240、242-249、251-253（大野豊編集）

編集後記

▼センターだより13号をお届けします。▼今号は、昨年、句集の復刻と句碑の建立が相成った夭折の俳人・川口重美特集としました。生前から親交の深かった上野燎氏と藤井安子氏より、このたびの復刻や句碑に至るまでの知られざるエピソード、重美への思いについて、原稿をお寄せいただきました。句碑の除幕式は昨年11月8日に行われました。重美を中心に、様々な縁が重なり、また皆が重美の句を高く評価していることが感じられる素敵な会でした。折も折、『朝日新聞』では、昨年10月22日に復刻についての記事が掲載され、本年1月18日には藤井氏と句碑についてとりあげられましたので、既にご存知の方も多いかと存じます。今後はさらに重美の句が愛されるように、当センターとしても顕彰していきたいと思っております。▼彙報で取り上げましたが、「郷土文学関係雑誌細目」をウェブサイト上にて公開しております。これは加藤禎行研究員と複数の学生の手による膨大なデータベースで、今後の郷土文学の調査研究において大いなる礎となることと自負しております。どうぞご活用くださいませ。▼日頃地道に活動しております本センターですが、ここ数年の成果が徐々に実を結んで来た実感しております。展示や他機関との連携にもさらに力を入れていきたいと考えておりますので、ご協力のほど、よろしく願いいたします。▼前号からカラー印刷を始めましたが、今号からさらに外部発注をすることにより、よりよい紙面でお読みいただけるようになりました。ご感想など、お寄せくださいましたら幸いです。（K）



■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター（〒753-8502 山口市桜島3-2-1）
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2009（平成21）年5月31日